

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5684号  
2月号  
令和6年2月1日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【特に注意を要する事項】

期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。

## 【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、特に期間のはじめはかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の降水量は、1週目を中心に低気圧や前線の影響を受けやすいため多いでしょう。また、向こう1か月の日照時間は平年並か少ない見込みです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	20	70
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	40	40	20

## 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。平均気温は、高い確率70%です。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

### <1週目の予報> 2月3日(土)～2月9日(金)

低気圧や前線及び湿った空気の影響を受けやすいため、曇りや雨となるでしょう。

### <2週目の予報> 2月10日(土)～2月16日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

### <3週目から4週目の予報> 2月17日(土)～3月1日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

## 普通作物

### 早期水稲

---

#### 1 スクミリンゴガイ対策

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）対策では、厳寒期の耕うんが効果的です。発生ほ場では、トラクターの走行速度を遅くし、ロータリーの回転数を早くすると、殺貝効果が高まります。

#### 2 播種と出芽

浸種は発芽揃いを良くするために水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度を目安に行います。水温10℃以下の低温を避け、夜間の冷え込みにも注意します。浸種後、催芽を30℃～32℃で24時間行います。

播種量の目安は、稚苗では1箱当たり催芽粉180g程度です。

#### 3 緑化と硬化

出芽後は、本葉1葉目が展開し、2葉目が抽出するころまで寒冷紗等で遮光します。温度は昼間が25℃以下、夜間は15℃以上で管理しましょう。

硬化では、前半の昼間は20℃以下、夜間は10℃以上で温度管理し、後半は外気にならします。かん水は床土温度を下げないよう午前中に行いましょう。

### ムギ類

---

#### 1 穂肥

月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では2月中旬に10a当たり窒素成分で2・5kg、加里で2kg程度を施肥します。

#### 2 土入れと排水対策

土入れは肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒効果があるため、節間伸長期前までに行います。排水対策として、ほ場の周囲や条間を作溝します。

（福川 泰陽）

## 施設野菜

### 共通事項

---

日中の温度確保や、内幌カーテンの開閉による光線確保を行い光合成を促進します。また、午前中の内幌カーテンの開閉は、ハウス上部の空気が十分に暖まってから数回に分けて行います。同時に、植物の結露が多い場合は、病気の発生を予防するために、早朝加温や谷換気の開閉幅などの設定を見直します。

また、暖冬の影響で、施設内が高温乾燥状態になりやすく、うどんこ病の発生が懸念されるため、病気を見つけたら蔓延する前に除去しましょう。

### きゅうり

---

促成のつる下ろし栽培では、「芯止まり」になりやすいため、開花節位は生長点から3～4節目を目標とし、開花節位が上がった場合には強めの摘果を行うとともに夜間の設定温度を上げて、草勢維持に努めます。

## ピーマン

---

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝は2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。開花節位が上がった場合は、こまめな収穫を行うことで着果負担を抑えます。

## トマト

---

果実肥大と着色促進及び食味向上のために、日射量と葉数を確保します。葉数は1株当たり15～18枚程度を確保し、早朝の結露で裂果が発生しないように、早朝加温や換気による除湿を行います。

## いちご

---

曇天が続く場合は、成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなるため、裂果等の品質低下防止と、着色促進のために夜温をやや高めに管理します。また、大玉果や食味向上のため裾玉を摘果します。今後、ハダニが増加しやすい時期になるために、古葉や収穫の終わった果梗はこまめに除去し、定期的に薬剤散布を行います。

(吉山 健二)

## 葉茎根菜類・いも類

### 共通事項

---

これから播種や植付けを行う品目では、発芽や活着を促すために、地温と土壤水分の確保が重要です。土壤を片手で握り、団子状態になる程度の土壤水分を目安にします。適度な土壤水分により、土壤消毒剤(くん蒸剤や粒剤)や除草剤の効果が高まります。

### 食用かんしょ

---

来月にかけて、トンネル栽培の挿苗時期です。徒長を防ぎ、充実した苗に仕上げるため、採苗10日前頃から苗は外気温に慣らしながら管理します。

サツマイモ基腐病を育苗床からほ場に持ち込まないため、育苗床では発病株の早期抜根及び持ち出しを徹底します。苗を切り取る高さは地際から5cm以上離し、切り取った苗は病害防止のため薬剤消毒をします。なお、薬液は処理当日に調整したものを使用します。

苗は適湿・適温を保ちながら数日間取り置きすると挿苗後の活着が良くなります。定植予定のほ場は、地温確保(18℃以上)のため、前日からトンネルを密閉します。

### さといも

---

早生品種の植付け時期です。連作障害が出やすいため最低4年はさといもを栽培していないほ場を選び、センチュウ対策として土壤消毒を行います。種いもは病虫害や芽つぶれ等のない健全なものを選び、大きさ順(30～50g程度)に揃え、種いも表面の土壤を洗浄し、水に浮く種いもは廃棄した上で、センチュウや乾腐病予防の薬剤消毒を行って植付けます。

### ほうれんそう

---

露地栽培では、寒波の影響で茎折れ、葉の白化や黄化が発生しやすくなります。寒波前の不織布被覆や、寒波前後の葉面散布等の対策を取りましょう。

今作は秋の少雨の影響で葉先枯れが散見されます。また、例年、春先には温度上昇による急激な生育で葉先枯れが発生するため、カルシウム剤の葉面散布や適期収穫に努めましょう。

(川崎 佳栄)

# 果樹

## 1 常緑果樹

---

### 完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。厳寒期を過ぎると気温が徐々に高くなり、過熟やうるみ果の発生が懸念されます。ハウス内の温度は昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように管理します。完熟果実は衝撃に弱いいため、過度の積み重ねを避けるなど、丁寧な収穫・出荷作業を徹底しましょう。

### マンゴー

早期出荷作型では、摘果の時期です。果実の縦長が5cm程度になったら、最終的に結果枝2～3本に対して1果となるように調整します。また、厳寒期を過ぎると、夜間の外気温が徐々に高くなるため、あざ果症の発生に注意が必要です。早朝や日の出後に果実結露が生じないように、ヒートポンプの除湿設定やこまめな早朝換気により湿度を低く保ちましょう。

後期出荷作型は開花期を迎えます。夜間の十分な加温や早朝換気を行うことで湿度を低く保ち、軸腐病などの発生をしっかりと抑えます。花穂をひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。灰色かび病に対する微生物殺菌剤の活用も有効です。

## 2 果樹全般

---

### 有機質の投入と土壌改良

高品質・高収量を実現するためには、土壌の通気性確保が重要です。完熟たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌の通気性の改善を行います。

土壌の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、必要に応じて石灰質資材で調整します。

(黒木 宏憲)

# 花き

## 電照ギク

---

2～3月出荷作型は最も暖房コストがかかるため、それぞれの品種・系統に適した変夜温管理を行い、コスト削減に努めます。

また、ハウス内の湿度が高くなると白さび病が発生しやすくなるため、換気除湿や循環扇の活用、農薬の予防的散布などの対策を行います。

## スイートピー

---

日長が長くなると、蒸散量や養分要求量が増加するため、かん水及び施肥を適切に行い、草勢低下を防ぎましょう。

また、花シミの発生が増加する時期となります。花シミの発生要因は大半が水滴の付着であるため、循環扇の活用や換気除湿等により結露防止に努めます。

## ホオズキ

---

地下茎の植え付けを開始する時期です。

病害虫をほ場に持ち込まないために、健全な地下茎の選別・調整をしっかりと行います。また、必要に応じて植え付け前に地下茎の消毒を行います。

## トルコギキョウ

---

天候不順時には、ブラスティングやチップバーンが発生しやすくなります。

生育後半の過剰施肥を控えるとともに、不要な枝や蕾の整理、カルシウム剤の葉面散布等により発生軽減を図ります。

## ラナンキュラス

---

収穫量が徐々に増加してくるため、草勢低下防止のための液肥を定期的に施用します。

また、ハウス内温度が低すぎると、光合成量が減少し、収量に影響しますので、日中の温度管理は15 程度を目安にします。

(山塚 裕美)

# 畜産

## 家畜防疫対策

---

2024年1月5日現在、全国6県において6例の高病原性鳥インフルエンザが発生しています。また、県内に飛来する野鳥からもウイルスが確認されています。野鳥が営巣地に帰る4、5月までは、農場への侵入リスクが特に高い状況が続くため、防鳥ネットの点検を強化し、破れがあれば速やかに補修をしましょう。

その他の家畜伝染病についても、ウイルスが伝染しやすい気象条件にあるため、農場にウイルスを侵入させないために、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、飼養衛生管理基準を遵守しましょう。

## 家畜

---

先月同様、寒さが厳しく、乾燥する時期になります。

特に、幼畜は、寒さや温度変化に弱いため、防寒対策を行いましょう。

乾燥により埃や塵が舞いやすくなるため、呼吸器病対策のために、細霧器等を使用して湿度を適度に保ち、畜舎内が乾燥しすぎないように留意しましょう。また、畜舎内の温度維持のためカーテン等で舎内を閉め切ることが多くなりアンモニアガスが溜まりやすくなります。換気扇等の活用によりこまめに換気をしましょう。

幼畜の寝床は常に清潔な状態に保ち、風が体に直接当たらないようコンパネ等で風を防止するとともに、コルツヒーター等の保温器具を活用し、防寒対策をしましょう。

## 飼料作物

---

イタリアンライグラスやエンバクの生育期になります。翌月から収穫作業等が始まるため、飼養管理に影響がでないよう計画的な作業に向けて収穫機械等の点検を行いましょう。

(藤井 真理)

## 特用作物

### 茶

---

#### 1 春肥の施用

春肥は、一番茶を始め二・三番茶の収量及び品質向上のために重要な肥料で、2月上旬頃から、2～3回に分けて施用するとより効果的です。肥料の種類や散布量は地域の基準に準じ、畦間全面に幅広く散布します。施用後は根を傷めない程度に軽く混和しましょう。樹勢の低下が見られるほ場では、春整枝後に液肥を3回程度散布すると樹勢回復に効果があります。

#### 2 春整枝の実施

春整枝の時期は平均気温10℃になった時が目安です。平坦地では2月下旬から、山間地では3月上～中旬頃に実施しますが、一番茶摘採期が集中するのを避けるため、品種の早晩生や地域の微気象等を考慮し整枝時期を調整しましょう。その際は、整枝直後に急激な低温に当たらないよう天気予報に注意してください。

整枝の高さは、葉層を8cm以上確保した上で、最終摘採位置から3～5cm高い位置が目安ですが、秋整枝を実施した茶園では、一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝しましょう。

また、春整枝後は防霜対策が必要となります。計画的に防霜ファンやスプリンクラーの点検・整備を行うなど、対策に万全を期してください。

#### 3 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃です。

地域の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布します。散布前までに、春整枝と裾刈りを済ませておくことで防除効果が高まります。

(竹田 博文)

### しいたけ

---

#### 1 植菌と仮伏せ

植菌は、暖かくなると害菌の繁殖も強力となるため、遅くとも3月中旬までには終わらせます。

仮伏せは植菌した種駒の乾燥を防ぎ、初期活着を促進する作業です。菌糸の活着・伸長に必要な温度と湿度を保つ必要があり、本県では、地際から50～60cm以下の高さに横積みする方法が多く使われています。ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で直射日光や風が当たらないように被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰が出来るようにして保温・保湿を図ります。

#### 2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、良質なしいたけの生産に努めます。

#### 3 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めます。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないよう丁寧に採取します。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋などで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵します。

(堀川 和也)

## たばこ

---

今月は、子床管理と施肥畦立が主な作業となります。苗の良否が本畑植付以降の生育に大きく影響しますので、健苗育成に努めましょう。

### 1 子床の管理

苗床肥土は、排水・通気性・水もちが良く、病害虫が発生しない、良質な肥土を使用しましょう。

仮植は、葉数5枚苗（米粒大までの葉数）で、根張りの良い苗を植えましょう。灌水のポイントとして活着までは、床面が乾かない程度に十分灌水を行いましょ。活着後は、日中表面が乾いた部分に軽く灌水を行い、夕方床面が少し乾く程度に灌水をやや控えて、病害発生や根腐れ防止を図りましょ。また、苗床が高温多湿にならないよう温湿度調整（昼間の管理温度は、20～25℃）を行いましょ。

本畑植付10日前位からは、苗の根張り促進と徐々に自然条件に近い状態にするための換気として、日中ハウスのすそ開けや、日照8時間程度の確保及び灌水制限等の順化处理を実施ましょ。

### 2 畦立・被覆

畦立は、ネリ畦防止のため、土壌水分に注意して行ないましょ。また、根張り促進のための地積確保と、排水対策も含めて30cm以上の高畦にましょ。

被覆は、早作早進のため透明マルチを原則とし、黄斑えそ病対策等必要に応じてシルバーマルチを活用ましょ。

### 3 農薬の適正使用

春消毒や苗床での農薬使用は、使用基準に則って最善の注意を払いながら行いましょ。

（宮崎県たばこ耕作組合）

## 農作業安全

---

ほ場や作業場の危険箇所を把握し、地図や見取り図を作成して「見える化」ましょ。

### 内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当ましょ。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載ましょ。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

## 向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害虫全般	—	いずれの病害虫も、多発してからでは防除効果が劣るので、発生初期の防除を徹底します。また、薬剤抵抗性害虫および耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用は避けます。 多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意が必要です。各種病害の罹病葉等は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病	やや多 並 並 並	べと病の発生が多くなっています。草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努めます。 うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。
	ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ	やや少 並	ミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で最低でも3回の連続した防除を行います。 タバココナジラミは、退緑黄化ウイルス（CCYV）を媒介するので、特に改植する場合は、次作に持ち込まないように注意します。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は可能な限り20日間以上蒸し込みます。また、改植時には粒剤や灌注（かんちゅう）剤等による防除を行います。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病	並 やや多	斑点病は多湿条件、うどんこ病は乾燥条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	やや少 やや多 やや多	ヒラズハナアザミウマは、主に花の中に生息していますので、薬剤防除は、薬液が花の中をしっかり付着するように行います。多発時は複数回の連続防除が必要です。 タバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。
	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 疫病 うどんこ病	並 並 並 並 やや多	うどんこ病の発生が多くなっています。上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、1週間間隔で2回以上の防除を実施します。 その他の病害は、多湿条件で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努めます。
冬春トマト	タバココナジラミ トマト黄化葉巻 病（TYLCV）	多 並	TYLCVを媒介するタバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるため、根ごと抜き取り、適切に処理します。
	うどんこ病	やや多	うどんこ病の発生が多くなっています。多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除を徹底します。発病果など被害部は早めに取り除きます。
冬春いちご	うどんこ病	やや多	うどんこ病の発生が多くなっています。多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除を徹底します。発病果など被害部は早めに取り除きます。
	ハダニ類	やや少	ハダニ類は、寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、天敵や物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。
	コナジラミ類 ヒラズハナアザミウマ	並 並	オンシツコナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。 ヒラズハナアザミウマの果実への加害は、例年3～4月以降に顕著に認められますが、低密度のうちから青色粘着板による誘殺などの防除対策を講じましょう。
1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。※は病害虫防除情報を発表していますので、ホームページをご覧ください。 2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、 <a href="http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki">http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki</a> です。			